

（仮題） 水野仙子と私

江馬 修

く無名だった吉屋信子を私に紹介したのも、水野仙子だった。

（後略）

一九一四年三月、私はついに本郷を離れて、郊外の代々木山谷に移った。代々木はもともと田山花袋との関係で私には忘れ難い土地となっていたが、その時分は女友水野仙子がそこに住んでいたので、月に二、三回は必ず出かけていた。こんど代々木へ移ることをすすめたのも、すぐに家を見つけてくれたのも彼女だった。二軒長屋の一つで、二畳と六畳のふた間だったが、もはや下宿ではなく、一戸住みだった。私は自炊した。忘れもしない、家賃は四円五十銭だった。

（中略）

自炊は面倒だった。よく外へ食べに行ったが、金のない時はそれもできなかった。そんな中で、いつも私を家にむかえて飯をたべさせてくれたのは水野仙子だった。今日では彼女の名はおおかた忘れられたが（彼女は若くて死んだし、死の前に自分はこの世に何も痕跡を残さず、きれいさっぱり忘れ去られたいと希望していたが）、その頃「暗い家」「徒労」などいくつかの佳作をかいて、その並ならぬ才能は文壇から一様に注目されていた。彼女は私より一つ年上で、東北生れの人らしくやや男性的な荒い面でもないではなかったが、心情のやさしい、温かい女性だった。そして不幸な家庭に悩みぬいていた。私はいつも姉に対するような親密さでつき合っていたので、一身上のこと、殊に恋愛の問題では何かと相談相手になってもらい、その結婚についてもずいぶん力になってもらった。私にとって、今日まであの人が生きていてくれたら、と心から懐かしく思い出される一人なのである。それから彼女のすぐ近くに、歌人今井邦子（山田邦子）が住んでいた。私はこの夫も娘もある女歌人の浮わついた恋愛三昧の生活と、虚偽の多い性格を好まなかったが、仙子と邦子の間に表面的な友人関係があったので、しぜん顔を合わせるが多かった。彼女たちを通して、私は詩人福士幸次郎と友だちになり、また後に銚子の海で溺死した三富朽葉、今井柏楊の二詩人とも知合になった。やや後になるが、十九歳ぐらいで、当時まだ全

底本…「二作家の歩み」（理論社）

昭和三十二（1957）年刊

入力…小林 徹

公開…令和七年八月二十九日

リンク…[水野仙子関連の参考文献](#)